

詩歌・小説の中のはきもの（第23回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

218 春待てり製靴工場の木型どち

磯貝碧蹄館

★『握手』から。靴を造るには木型が絶対必要だが、木型（現在はプラスチックが多くもちいられているので靴型という）は全く地味な存在で、たいていの人の目に触れもしない。靴造りに携わる人なら、そんなフォルムだけの物体の上に様々なデザインの花をイメージできるだろうが、素人が製靴工場へ見学に行き、木型どうし（どち）が睦み合うように春を待つ姿を見たのだとしたら、この俳人の感性に感服せざるをえない。

219 茶屋のドテラは短く、私の毛脛は一尺以上も露出して、しかもそれに茶屋の老翁から借りたゴム底の地下足袋をはいていたので、われながらむさ苦しく、少し工夫して、角帯をしめ、茶屋の壁にかかつてみた古い麦藁帽をかぶつてみたのであるが、いよいよ変で井伏氏は、人のなりふりを決して軽蔑しない人であるが、このときだけは流石に少し、気の毒そうな顔をして、男は、しかし、身なりなんか気にしないほうがいい、と小声で呟いて私をいたわってくれた…

太宰 治

★『富嶽百景』から。そんな格好で登山服姿の井伏鱒二と御坂峠付近のヤブをかき分けて山歩きをしたのだという。御坂峠の宿屋に逗留して、あの有名な「富士には、月見草がよく似合うふ」という言葉が書かれたのであるが、郵便物を取りに河口湖まで

行った帰りのバスの中からちらっと見たときのものだった。ドテラに地下足袋姿でそんなことを口にしたのでなかったことを日本文学のために喜びたい。

220 南倉所納の緋皮の履^{はきもの}は、聖武天皇が大佛開眼会に参列の際に、お召しになったものと伝えられる。緋皮の表と白皮の裏とを縫い合わせ、皮の接目に黄金線の押縫を施し、ところどころに珠玉をちりばめた金銀花座をかざった荘厳華麗な、まことに天皇の御料にふさわしい御履といえる。…現行の御物目録には「衲御礼履 平城宮御宇後太上天皇御物」とあるが、衲御礼履^{のうのこらいり}は御礼服の上に衲（補綴の意味）の御袈裟を召された場合に用いられる御履といわれている。

松嶋順王

★『正倉院よもやま話』から。保存されている古い時代の履物というのは本当に少ない。このような履物が正倉院にあるということすらよく知られていないので、収録した。どこに何が存在するかそのことだけでも知っていれば、拝観する機会はいつかやって来ると信じたい。ところで著者は「衲」は「納」の伝写の誤りではないかと記している。名称も確定していないというのが由緒を思わせいい。

221 「あるともあるとも、昔の公家の作法にちゃんとあるよ。あの京都御所でのしかつめらしい行事のなかに、束帯のいでたちに浅靴という、黒塗りの木履を始末する作法がある。これは口伝です。向

う向きにぬいで上がって、懐中の檜扇の
先で靴の向きをかえる。平安朝以来の作
法です」といわれました。

塩月弥栄子

★『心づかい心くばり』から。「日常生活
における靴のぬぎ方」について、有職故実
の先生に作法がありますかと訊いた返事
である。玄関で靴をぬぐ習慣のない欧米に、
靴脱ぎマナーのお手本を求めることはでき
ない。そこでお茶の心に学んで「靴を上
がるほうに向かってぬぎ、正面をさけてさり
気なく脇に寄せておく。それをいかにも自然
の流れで、目立たぬような動作するの
です」。さりげなく爪先を外に向ける、「後
ずさりに上がることは、ときとして許され
ますが、無造作すぎて、粗雑に感じられま
す」。

222 彼は後から来る直子の、身体の割り
にしまった小さい足が、きちんとした真
白な足袋で、襪をけりながら、すっす
と賢こ気に踏み出されるのを眼に見るよ
うに感じ、それが如何にも美しく思われ
た。そういう人が—そういう足が、すぐ
背後からついて来る事が、彼には何か不
思議な幸福に感ぜられた。

志賀直哉

★『暗夜行路』から。五日ほどたって彼、
時任謙作と直子は結婚する。女性のか弱さ
が小さい足に、清純な様子が白足袋に象
徴されている。めりはりのきいた歩き方が目
に見えるようだ。小さな足に妻となるひと
のすべてを婉曲に表しているところがいか
にも日本の作家らしい。西洋の作家なら眼
とか鼻、唇、顎、額を描く、結婚前の女性
の足など決して描写しない。

223 「お前にとって〈男の子〉のイメ
ージとは具体的にどういうものであるか」
という風に質問していただけるなら…
(1)運動靴を履いて(2)月に一度(美容
室ではなく)床屋に行って(3)いち
いち言い訳をしない…(1)の項目に関し
ていえば、僕は今でもしっかりと男の子の

条件を満たしている。僕は一年のうちだ
いたい三百二十日くらいスニーカーを履
いて暮らしているし、たまに革靴を履い
たりすると、なんだか身分を詐称してい
るような気がして、どうも落ち着かない。

村上春樹

★『やがて哀しき外国語』から。会社勤
めを退いてから、私が革靴を履くのは年間
五十日、そのうちの四十日は登山靴である
から、断然スニーカー党になってしまった。
上野で美術展を観ると、露伴の五重塔の
あった谷中から鷗外の観潮楼があった団子
坂、白山、六義園、とげ抜き地蔵尊のある
巢鴨、近藤勇の碑がある板橋駅前を抜け、
東上線の下板橋駅まで途中古本屋数軒を覗
いて二時間半ないし三時間の行程である。
スニーカーを履いたら、〈男の子〉感覚で
歩けるので俄然東京が狭くなった。

224 「貴賓室だって」

徳山に目をやると、彼は言葉もなく僕
にうなずいた。僕は、自分の足を見下し
た。黒いゴム長靴—こんなもの履いて来
るんじゃない。

今井さん(邦一氏、講談社文芸部長)
が現れ、そして時間になると大勢の人た
ちがその部屋に入ってきた。もう一人の
受賞者—中津文彦氏は、ちゃんとした
スーツを着込んだ立派な紳士だった。

その部屋の中で、僕と徳山だけが、間
違って部屋に潜り込んだガキのように思
えた。

井上夢人

★『おかしな二人』から。江戸川乱歩賞受
賞のとき、骨の曲がりかけた折りたたみ傘
をさし、半袖シャツにGパン、そして長靴
を履いて受賞式に行ったというのだから居
たたまれなかったのである。そうして、講
談社の担当者たちも井上たち以上に落ち着
かなかつたに違いない。

225 同勢合わせて九十六人、無事にアメ
リカに着いた。船中の混雑はなかなか容
易ならぬことで、水夫共は皆筒袖の着物

を着ているけれども穿物は草鞋だ。草鞋が何百何千足も貯えてあったものと見える、船中ビショビショで、カラリとした天気は三十七日の間に四日か五日あったと思います。試に船の中は大変な混雑であった（サンフランシスコ着船の上、艦長の奮発で水夫共に長靴を一足ずつ買ってやって、それから大いに体裁がよくなった）。

福沢諭吉

★『福翁自伝』から。安政六年（一八六〇）冬、威臨丸で渡米の時の話である。案内されたホテルの絨緞は、「日本で言えばよほどの贅沢者が一寸四方幾千という金を出して買うて、紙入れにするとか蓐入れにするとかというようなソナナ珍しい品物を、八畳も十畳も恐ろしい広い所に敷き詰めてあって、その上を靴で歩くと、さてさて途方もないことだと実に驚いた。けれどもアメリカ人が往来を歩いた靴のままで颯々と上がるから、此方も麻裏草履でその上上がった」と記している。

226 お気に入りの一足は、十年位前に買った赤い裏皮の靴。…その靴を履くだけで気分が愉しくなってしまうような、サーカスのピエロみたいな靴だ。…もう一足好きだったのが、二十年位前にパリの「モード・フリゾン」で買った靴。その店の靴は当時、殆どすべての靴が一点物に近くて、各々の靴に名前が付けられていた。

筒井ともみ

★連載エッセイ『着る女』の「靴フェチと祝祭」から。“バレリーナ”という愛称を持つのは黒のサテン靴だという。ブランドという大きなくくりではもう満足できない人が多いのではないだろうか。オーダーメイドの靴には総て固有のニックネームがあっっている。子供のころ、自分の持っているベーゴマに、角をつけたり、ペチャにした上、その一つ一つに名前を付けている友だちがいた。彼には小さな世界を支配している幸福な王子のような印象が残っている。

227 女性たちはいつも素足で、高さ四・五～五インチ（十～十二センチ）の、鼻緒でしっかり固定された木のサンダルしか履かない。…男性は親指にしっかり固定された木のサンダルを素足に履いている。これらのサンダルは、雨の日には木でつくられたもの〔下駄〕で、からっとした天気の日には藁か竹でできたもの〔草履かあるいは草鞋〕となる。

ズボンをはくの許されているのは、政府の役人か兵士たちだけである。彼らはみな親指にサンダルが固定できるような手袋型をした濃い青の木綿の靴下〔足袋〕をはいている。

ハインリッヒ・シュリーマン

★『シュリーマン旅行記 清国・日本（石井和子訳）』から。トロイ遺跡の発掘で有名なシュリーマンが日本に来て、きちんと日本人の足元を見て行っている。私は観光で日本人がまだ余り行っていないところから帰国した人に「現地の人にはどんな履物を履いていましたか？」と尋ねることにしている。たいてい答えられない。今、世界のどこへ行っても同じような“靴”を履いているから、無理もない。しかし全く同じでもなく、少しは変わったところもありますから、たまにはその国の人の足元も見に来てほしい。